

巻頭言

検査と研究



公益財団法人日本食品油脂検査協会理事長 板橋 豊

研究で最も大切なことは新規性（オリジナリティー）であることに異論はないでしょう。研究者も研究を試みる若い人たちがこの世で唯一、世界で最初を目指し、失敗を繰り返しては思考し、新しい方法を開発してはそれを試してみる。試行錯誤を重ねながら自然の本質を明らかにしていく過程は何事にも代えがたく、ようやくうまくいったときの喜びは研究者冥利に尽きると思います。100回やって1回成功すればよし、とするのが研究の世界と言ってよいでしょう。

一方、100回やったら100回とも成功しなければならないのが検査の世界です。油脂や食品の検査だけでなく、医薬品検査や臨床検査など人の健康に関わる検査業務では失敗は許されません。そこでは、基準油脂分析試験法等の公定法や評価の定まった方法を用いて様々な成分を分析し、精確なデータを迅速に得ることが重要で、失敗を重ねながら新しい方法を考案して分析してみるなどの挑戦は禁忌です。研究の経験のない若い方々が「資格」なしに卒論や修論を通して研究の世界に直ちに飛び込めるのは研究の大きな魅力であり特徴ですが、納期の定まった日常の検査ではそうしたトライアルは認められません。

信頼性が担保された高品質の検査結果を社会や依頼者に迅速に提供することが検査機関の使命であり、そのために最新の検査技術を導入し、検査員は検査技術の向上に励み、組織は検査精度の維持・管理に努めなければなりません。最新の検査技術の導入には、分析機器の導入に加えて、それを使いこなす人材の育成が含まれます。検査員の検査技術の向上のためには、組織内外での研修が不可欠であり、検査精度の維持・管理には施設内部で行う内部精度管理と施設間で測定値を比較する外部精度

管理が必要で、望ましくない結果が認められたときは、速やかにその原因を明らかにして再発防止を図らなければなりません。機器の点検は不可欠で、これにはメーカーによる定期的な性能チェックの他に、直ぐに使用予定のない機器であっても急な依頼に備えて日常の動作確認は欠かせません。検査方法については妥当性確認が不可欠なのは言うまでもありません。こうした環境で測定された検査結果は「試験検査成績書」、「検査証明書」として発行されるわけです。

研究サイドからみると、検査業務は自らのアイデアを出せないとか、決まった方法で多数の検体を分析しなければならず退屈で面白さに欠ける仕事と思うかもしれませんが、そうではありません。ものを正しく測ること、測れることは検査技術者の喜びであり誇りであり、誰しもが容易にできることではありません。一方、検査サイドからは、証明書の要らない研究で得られたデータに幾ばくかの疑問を覚えることがあります。検査機関と研究機関が互いに協力し合うことで、研究はよりスムーズに進み、検査業務は研究に繋がると思います。学会の年会や討論会を利用して、両者が交流できる場、特に検査に携わる人たちが発表できるプログラムがあるとよいと思っています。検査も研究も、その根底には人材育成のための教育があります。学会は油脂・脂質の検査、研究を希望する若い人たちが分析機器の特徴や分析化学の勘所をセミナーや実習を通して習得できるように、これまで以上に支援して欲しいと願っています。

研究に携わる者は自身の腕を奢ってはいけない、検査に携わる者は自身の腕に自信をもってよい、と思いながら日々を過ごしています。

(北海道大学名誉教授)